

答えを持っていません。もし将来、戦争が終わり、日露文化交流が回復してロシア映画が自然に日本へ入ってくるようになったなら、この上映会の役割は変わるかもしれません。そのときか、いつの日か、私は再び一人の字幕翻訳家として、静かに翻訳の仕事に専念することになるのでしょうか。

ただ、昨年末、私にとって一つの大きな転機がありました。2月1日、現代ロシア映画の最新作『預言者 アレクサンドル・プーシキン物語』(2025年ロシア)を上映することを決断したのです。これまで旧作を中心に「発掘」してきた当上映会において、これは明らかに例外です。

昨年、この作品を自宅のモニターで視聴したとき、私は感動してしばらく言葉を失いました。ロシア最高の詩人とされるプーシキンの生涯を、ミュージカル・ファンタジーという大胆な形式で描いた本作は、現代ロシア映画の現在地を示す圧倒的なエネルギーに満ちていました。従来語り口とは大きく異なるこの作品が、日本の観客にどう受け止められるのか、不安がないわけではありません。しかし、「今、この瞬間のロシア映画の息吹を届けたい」という一心で、本国の配給会社に直接連絡を取り、上映にこぎつけました。

この特別上映会は、これまでの二十回という歩みの延長線上にありながら、同時に次の段階を示す試みでもあります。これまで旧作を通じて築いてきた観客との信頼関係があるからこそ、あえてこの「現在」を提示できる。政治的な評価とは切り離し、映画という表現でロシアをいまの時間軸の中で受け止める場をつくること。それは、ひとつの挑戦であると感じています。

結びに代えて

ロシア語映画発掘上映会は、今後も必ずしも同じ形で続いていくとは限りません。しかし、映画と言葉、そして人との出会いの中で、その時々に必要なと思える形を探りながら、この歩みを続けていきたいと考えています。

活動を知り、足を運んでくださる皆さま。皆さまの温かな関心がなければ、この灯火はとうの昔に消えていたことでしょう。この場を借りて、あらためて心より感謝申し上げます。

二十回という節目は、一区切りであると同時に、新しい問いの始まりでもあります。2月1日の特別上映会を含め、これからもロシア語をめぐる文化交流の場として、皆さまと共に歩んでいければ幸いです。会場で皆さまとお会いし、共にスクリーンを見つめる時間を心待ちにしております。

(『ロシア語映画発掘上映会』主宰者)

日ロ極東学術交流シンポジウム ロシアから7名の研究者を迎え、 大阪で6年ぶりに再開

12月13日、大阪・箕面市の大阪大学箕面キャンパスにて、第36回日ロ極東学術シンポジウムが、2019年以来6年ぶりに開催されました。

シンポジウムには、ロシア科学アカデミー極東支部のラーリン氏(歴史・考古学・民族学研究所)ほか6名の研究者が来日して参加。日本側からは、五十嵐徳子氏(京都外国語大学教授)、雲和広氏(一橋大学教授)、藤原克美氏(大阪大学教授)らが討論に立ち、活発な意見交換を行いました。

ロシア側の参加者と報告テーマは以下のとおりです。
イサエフ・A・G(ロシア科学アカデミー極東支部・経済研究所)「ロシア東部地域開発政策：現状と展望」
マジトワ・M・G(同支部・経済研究所)「日露貿易経済関係：新たな現実」

バルダル・A・B(同支部・経済研究所)「ロシア東部の交通網：国際関係の発展の見通し」

ラリナ・L・L(同支部・歴史考古学民族学研究所)「現代ロシアの若者の価値観について」

クラディン・N・N(同支部・歴史考古学民族学研究所)「考古学・人類学分野における日露共同研究」

ポズニャク・T・Z(同支部・歴史考古学民族学研究所)「19世紀末から20世紀初頭のウラジオストクにおける日本人」

新型コロナとウクライナ戦争で日ロ間の人的交流や学術交流は長らく途絶えていましたが、このシンポの再開を機に、交流の再活性化を期待せずにはおれません。なお、シンポジウムの内容は近々に日本語・ロシア語の報告書として刊行される予定です。

以下は、JIC 岡本によるシンポ参加報告記です(編集部)

●極東学術シンポジウム報告

岡本健裕 (JIC 大阪)

大阪大学箕面キャンパスといえば、粟生間谷(あおまだに)の急斜面を息を切らせて登った先、...だったのは、もう5年近く前の話。今の箕面キャンパスは、千里中央の隣駅「箕面船場阪大前」を降りてすぐ、直結と言ってもいいくらいの交通至便な場所にあります。ここが、かつての大阪外国語大学の伝統を受け継ぐ名門、阪大外国語学部の新しい核心部です。

2025年12月13日、当地で開催された日ロ極東学術シンポジウムを聴講してきました。2019年を最後に、新型コロナや戦争でしばらく途絶えていたのですが、今回久しぶりに再





開されたのです。

<会場の人びと>

受付では京都外国語大学の五十嵐徳子先生が素早く私を見つけて声をかけてくださいました。ほとんどアポなしで押しかけたのに、私も先生方からだいぶ認知されるようになったものだと、うれしくなります。

会場に入ると「サカモトサン」と呼びかけられました。声の主は島根県立大学のワジム・シローコフ先生です。シローコフ先生は、私が JIC で頭が上がらない先輩である小西さんの恩師で、つまりもっと頭が上がらないお方です（でも名前は後で訂正しておきました）。

遠目には一橋大学の雲和広先生、大阪大学の藤原克美先生、新潟大学の道上真有先生の姿も見えます。道上先生と私は大阪で知り合ったのですが、共通の友人にウズベキスタン大使館の畑野真也さんがいて、互いに同時期にモスクワで留学していた縁があります。

ロシア側からは、ロシア科学アカデミー極東支部から数多くの研究者が参加されました。ざっと見渡すと、在大阪ロシア領事館からエレナ・シュベツォワ領事、紀田馨・大阪府議会議員、大阪大学のヨコタ村上孝之先生、朝日新聞の記者さんも来られているようでした。

<シンポジウム>

場内の使用言語はロシア語および日本語と案内されていましたが、実態は 8 割方ロシア語で進行されました。というのも、上記の通り発表者が全員ロシア人研究者だったからです。私としては久しぶりに早口のロシア語の洪水に飛び込んで、さびつきそうなロシア語力にどうにか油をさしたような格好になりました（日本語訳のレジュメにもずいぶん助けられました）。

ニコライ・クラディン氏が、考古学・人類学分野の日露協力について発表されているとき、投影されたスライドの写真の中に見つけた顔があることに気づきました。間違いなく、あれは函館大学の安木新一郎先生の若き日の姿です。安木先生と私は大阪で知り合ったのですが、共通の友人にウズベキスタン大使館の畑野真也さんがいて、互いに同時期にモスクワで留学していた縁があります（このくだり 2 回目）。



さらに言うと安木先生の奥様も、私や畑野さんと同時期にモスクワに留学していた直接の友人関係にあります。畑野さんの顔が広いのか、それとも世界が狭いのか、おそらく両方でしょうが、おかげで初対面のクラディン氏のことが一気に身近に感じられてきます。

旅行会社の人間として、興味深く聴いたのはアンナ・バルダリ氏による、ロシア東部の交通複合体と国際関係の発展の展望についての発表です。ロシア極東の国境ということになり、とりもなおさず対中国、対北朝鮮、対モンゴルということになり、日本人の通過はかなり少ない国境ばかりなのですが、こういう場所の手配こそ、私達 JIC のような専門旅行会社の腕の見せどころです。

バルダリ氏の発表は人流ではなく物流を扱うものだったのですが、アムール川に新しく架かった 2 本の橋（ブラゴベシチェンスク-黒河、ニジネレーニンスコエ-同江、いずれも対中国）の実態や、北朝鮮国境の率直な現実が議論される大変おもしろいものでした。

この発表のあとで、バルダリ氏との討論者を務められた新潟県立大学の新井洋史先生に声をおかけしました。ありがたく頼らせていただいた日本語訳のレジュメ、これはそれぞれ討論者が用意されたものなのかが気になったのです。すると、この訳は自動翻訳に若干手を加えて、全員分まとめて用意されていたものだという答えでした。なるほど、ところどころ違和感のある翻訳があったのはそのせいかな…。しかしこの分量、この水準をほぼ自動で用意できてしまうんですね。参りました。

<場外>

不思議な巡り合わせで、青山学院大学の羽場久美子先生と、シローコフ先生、そして私の 3 人でランチを一緒にしました。シローコフ先生のゆったりとした巻き込み力に、近くにいた羽場先生と私がふんわりと捉まって、気がついたらみんな、駅前の図書館併設のカフェに座っていたのです。これが滅法楽しかった。お話しをしていると、だんだん世事を離れて時間の流れが変わるような錯覚が生じるのです。そしてこの日、私のロシア世界はまた少し狭くなりました。これは錯覚じゃなく、確かなことです。

関西ロシアサークル連合会の クリスマスパーティ (12月20日) 50名以上の参加で大盛況

小原 浩子 (JIC 大阪)

12月20日(土)、関西ロシアサークル連合会のクリスマスパーティが、大阪市内で50名以上の参加者を集めて開催されました。このパーティは、京都日ロ学生交流会「アケアン(OKEAH)」と関西大学ロシア語サークル「ペチカ」、大阪大学ロシア語サークル「ラスヴェート」の3団体が、関西ロシアサークル連合会として共同で実施したものです。

12月初めにInstagramでフォローしていると、関西のいくつかの大学のロシアサークルでクリスマスパーティの案内が一斉に出ていたので興味をひかれました。「学生ではないが参加できますか?」と聞いてみたところ「JICの方ならぜひどうぞ!」と快く参加OKいただきました(実は、担当者がJICの旅行・留学イベントの参加者で、JICをよく知っている方だったのです)。

参加にあたりパーティ参加者のLINEグループに登録したのですが、私の後もどんどん参加者が追加され、パーティ当日には50人を超えるメンバーが登録されていました。

当日の会場は、大阪・鶴橋にあるビル5階の貸しスペースでした。小学校の教室の1.5倍くらいの広さで、バーカウンターと音響設備が備わった黒塗りの部屋です。通常はアーティストのライブなどが行われている場所のようです。

受付にいたのは京都日ロ学生交流会「アケアン(OKEAH)」の会長で関西ロシアサークル連合会の代表でもある中島さん。京都の「アケアン」は2年前から活動を始め、京都産業大学や京都大学、同志社大学、立命館大学のロシア語を学ぶ学生がメンバーとなって、モスクワ国際関係大学 MGIMO Japan Club との日本語・ロシア語会話クラブ『日露会話クラブ』の活動や、在日ロシア人との交流イベントを行っていると話してくれました。

パーティの参加者は、見たところ日本人7、外国人3ぐらいの割合でした。外国人はロシア人だけでなくキルギス人や中国人、韓国人などもいたので、実際はもう少し外国人割合が高かったかもしれません。

パーティ参加費は1500円で、主催メンバーの手作りブリュイ(ロシア風クレープ)や飲み物が用意されていました。事前のLINE連絡で「飲み物持ち込み可」の案内があり、参加者はジュースやお酒を各自持ち込んでいました。私はジンジャーエールを持ち込みましたが、ロシア人学生の中にはウ



オッカを2-3本持ち込んでいる強者も見かけました。

17時過ぎに主催メンバーの開会の挨拶でパーティが始まりました。会場利用の注意事項と当日のスケジュールが伝えられ、それを隣のロシア人メンバーがロシア語に通訳し、参加者全員に伝えられました。

最初のうちは知り合いどうして固まったり、所在なげにしている学生もいましたが、主催メンバーがお互い知り合いになれるよう後押しして雰囲気を作っていました。参加者の中にはロシア語は第2外国語でそれほどやっていない学生や、ロシア語とは関係のない学生もいましたが、ロシア語をやってもいなくてもロシアに興味のある学生が気軽に参加でき、ロシア語圏の人たちと交流できるオープンな雰囲気がとてもよかったです。

1時間半程度の歓談の後、手作りクリスマスケーキの企画が始まりました。スポンジ台にホイップクリームを塗り重ね、その上にチョコやジャムなどでデコレーションする簡単なクリスマスケーキでしたが、参加者が工夫しながら和気あいあいと作っていました。味はまあまあ、でもすてきなクリスマスケーキの出来上がりです。その後はプレゼント交換ゲームで盛り上がり、最後はロシア人のパーティでは定番のディスコタイムとなりました。日本の曲やロシアの曲で、全員が音楽に合わせ思い思いに体を揺らしました。最初は見ていただけだった学生も、みんなであつながつながって踊るうちに、楽しげにリズムを刻むようになりました。

17:00 開始 21:30 終了という長時間のパーティでしたが、話をしたり踊ったりしているうちに、あっという間に時間が過ぎました。最後に主催メンバーがあいさつし、全員での写真撮影の後パーティは終了となりました。

50人以上の大パーティを成功させた関西ロシアサークル連合会の活動は、ウクライナ戦争で日ロ交流が中断状態にある中でも、ロシア語を学びロシアに関心を持つ学生たちの交流意欲が決して衰えていないことを示しており、とても勇気づけられます。今後とも学生ロシアサークルの様々な活動に注目していきたいと思います。

第 33 回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

出場者の実力がレベルアップ

優勝者にJICから賞品を提供

岡本 健裕 (JIC 大阪)

2025 年 11 月 29 日 (土)、創価大学で開催されたロシア語スピーチコンテストに、今回も出席してきました。私達 JIC はこのコンテストの協賛企業として、優勝者に賞品を提供しています。

今回の出場者は、エレメンタリー部門 7 名、スタンダード部門 5 名、スタンダード・ビデオ部門 4 名の計 16 名でした。

各部門とも 3 位まで表彰され、さらにエレメンタリー部門には特別賞も授与されます。JIC からはスタンダード部門優勝者に賞品として、オンラインロシア語研修 (サンクトペテルブルグの語学学校での 16 レッスン) を贈呈しています。

前回まで、特別賞はエレメンタリー部門ではなく、スタンダード部門とスタンダード・ビデオ部門の方にあつたのですが、部門ごとの出場者数の実態を勘案すると、今回の調整でより適切なバランスになったと言えるでしょう。

審査員は、上智大学の村田真一教授を審査員長に、スヴェトラーナ・ラティシエワ (上智大学教授)、岡田邦生 (ロシア NIS 経済研究所元所長、モスクワ・ジャパクラブ前事務局長)、道口幸恵 (ロシア語通訳協会前会長、会議通訳者) の各氏が務めました。

<エレメンタリー部門>

出場者 7 名のうち高校生が 2 名いて、勇気ある若者の挑戦の門として、エレメンタリー部門の存在感はもはや不動のものとなっています。当部門では、スピーチは主催者が用意した同じ課題文を暗唱し、その後質疑応答を受ける形式で、このシステムもすっかり定着したと感ずります。

今回、何も見ずに最後まで暗唱を成功させた方が 4 名、カンニングペーパーありで乗り切った方が 2 名、カンニングペーパーなしで頑張ったものの時間内に暗唱を終えられなかった方が 1 名でした。半分近い方が暗唱に成功しなかったことになりませんが、どんなに入念に練習していても本番で真価を発揮できないことはあるものです。立ち往生しようとも、挑戦する勇気こそが尊い。これからも奮って参加あれ！

エレメンタリー部門の 1 位は上智大学の井橋奈々 (いなし・なな) さんでした。井橋さんの暗唱は涙が出るほどすばらしかった。単に暗唱するにとどまらず、課題文の登場人物を的確に演じ分けていたのです。「ロシア語で演技ができる」とい



う域に達していたのは、この部門では彼女だけで、相当練習を重ねたのだらうと推察します。質疑応答も抜群に美しく、言葉が溢れ出るというのがふさわしいやり取りでした。井橋さんはすでに、ロシア語を憶えるという段階を超え、ロシア語で考えることができているのでしょう。

2 位は創価大学の松川涼香 (まつかわ・りょうか) さんでした。松川さんは暗唱に淀みがなく、終始にこにこしながら楽しそうにスピーチをしていたのが印象的でした。質疑応答にもしっかりした答えを返していて、彼女は必ず 2 位に入賞するだろうとわかりました。

3 位は創価大学の柳心優 (やなぎ・みひろ) さんです。柳さんは少々つかえた箇所もありましたが、2 位に迫る内容のスピーチと質疑応答で、3 位入賞は当然のことと感ずります。

特別賞は関東国際高校の岡本英寛 (おかもと・ひでひろ) さんでした。岡本さんのスピーチは、淡々としていながらも耳に心地よく、確かな記憶で最後まで話し切っていました。また質疑応答でも窮することなく答えることができていました。将来が楽しみです。

今回は、1 位が超エレメンタリー級と言ってもいいくらいの実力者だったのですが、このように出場者の力の振れ幅が大きいことこそが、エレメンタリー部門らしさであり、魅力でしょう。出場者同士でも、大いに刺激を受け、励みになるはずですが、また、特別賞がエレメンタリー部門に移設されたこともよかったですと思います。高校生の岡本さんの挑戦に、ふさわしい賞で報いることができたからです。

<スタンダード部門>

スタンダード部門は、出場者がオリジナルのスピーチを用意し、制限時間内に暗唱したのち、質疑応答をする形式です。

今回は、出場者の実力の平均値が前回よりも大きく上がっていることを感ずりました。まずほとんどの方が暗唱を最後まで完了できたこと、そしてスピーチのテーマと内容にそれぞれ光るものがあったこと、さらに皆が質疑応答に食欲に食らいついて、時間がかかっても言葉を探しながら納得いくまで答えていたことです。

スタンダード部門 1 位は、創価大学の須藤優一 (すどう・ゆういち) さんでした。須藤さんはゲームを通じてロシア語

を学んだ経験と、大学で出会ったロシア人の友人との交流から得た気づきをテーマに、人が互いに理解することの大切さを訴えました。特に" ...именно сейчас нужно понимать эту страну. Не через телевизор и новости, а через прямой диалог и личное общение." (まさに今、この国を理解する必要がある。テレビやニュースを通じてではなく、直接的な対話と個人的な交流を通じて) という一節は、まったく私達JIC と思いを同じくするところです。須藤さんはロシアを訪れることを夢見ているとのこと。ぜひ実現してください。心から応援いたします。須藤さんにはJIC から賞品を贈呈いたしました。



スタンダード部門の2位は創価大学の柳井正勝（やない・まさかつ）さんでした。柳井さんは前回、スタンダード・ビデオ部門に出場し3位を獲っています。今回はアゼルバイジャンのシェキへ訪問した際に、現地の博物館の館長と意気投合した体験談を語ってくれました。この内容が非常に興味深かったのはもちろんですが、おもしろかったのは質疑応答の際に「なぜアゼルバイジャンへ行くことを決めたのか」という質問に対して、「アゼルバイジャンの国歌と、АзССР（アゼルバイジャン社会主義共和国）の国歌が好きだから」と答えていたことです。これには思わずにやりとしました。たいへんマニアックでよろしい。

3位は社会人のネルソン久怜（ねるそん・くれい）さんでした。ネルソンさんは高校卒業後、ロシア語ゼロの状態でウラジオストクからロシアを3ヶ月かけて横断する旅をし、途中、コミ共和国のノーシュリ（Нощуль）村の友人宅で2週間滞在した体験を語るという、少々ぶっ飛んだ内容のスピーチで、個人的には断トツで興味をそそられました。少々残念だったのは、スピーチを最後まで話し切ったものの、制限時間を若干超過してしまったことです。しかし、彼のロシア語はテンポよく滑らかで、普段からよく使い込んでいるであろうことが想像できます。異色の経歴と行動力を持つ彼が、これからますますロシアへ深く入り込んで、知る人の少ないロシアの断面を見せてくれることを期待します。

また今回、賞は逃したものの、印象に残ったのは上智大学の高橋由風（たかはし・ゆな）さんです。高橋さんは前回のスタンダード部門で2位を獲っています。今回はボリス・ゴ

ルバートフというソ連の作家が、日本の被差別部落問題を題材にした短編小説を書いていたこと、水平社博物館訪問をきっかけにゴルバートフを研究し始めたことを、スピーチに仕立ててられました。ほとんど知られていないソ連の作家の意外な業績に少しずつ迫っていくさまは知的刺激に溢れていました。その内容の濃さゆえか、惜しくも時間切れでスピーチを最後まで話し終えることができませんでしたが、質疑応答では水平社設立者の一人である西光万吉やシベリア抑留者向け新聞（日本新聞）などにも触れながら果敢に多くを語り、研究者魂の発露を感じました。

<スタンダード・ビデオ部門>

スタンダード・ビデオ部門では、出場者はオリジナルのスピーチをあらかじめ録画した動画を提出していて、審査も先に終わっているという点が、他の部門と大きく異なっています。この部門ができたことで、遠隔地からも参加がしやすくなりました。また、このビデオ部門を会場で上映している間に、舞台裏ではエレメンタリー部門とスタンダード部門の審査を同時に進めることができるなど、メリットがたくさんあります。

一方、ビデオは失敗しても撮り直しが可能で、質疑応答もできません。この点で、本番の緊張感や当意即妙さを失うところがどうしてもあります。一長一短というわけですが、このビデオ部門によって、ロシア語スピーチコンテストが新しい参加者の獲得に成功していることは確かです。

スタンダード・ビデオ部門1位は神戸市外国語大学の徳山桃香（とくやま・ももか）さん。2位は大阪大学の渡戸愛梨（わたど・あいり）さん。3位は筑波大学の柴田葵（しばた・あおい）さんでした。

どなたも落ち着いた話し方の聞き取りやすいスピーチで、実力の高さをうかがい知れるものでした。次はぜひ対面の部門にも挑戦いただきたいです。

<審査員長講評>

今回は、上智大学の村田真一先生が初めてコンテストの審査員長に就かれ、次のような講評をくださいました。

「昔に比べるとみな上手になっています。さらに上達するならば、歌を歌って拍をつかんだり、演劇で細かい発音を体得するのがお薦めです。また、古典を読み込んで使えるフレーズを吸収しましょう。50年前に朝日新聞主催のロシア語スピーチコンクールに出たときは私もガチガチに緊張しました。演劇を通じて親交のあった俳優の仲代達矢さんも本番前にはいつもブルブル震えて緊張していたのです。プロでもあがるのだから、忘れたり、時間オーバーしても気にしないことです。」

演劇人であられる村田先生のお話を聞いていると、かつてJIC でアルバイトをしていた上智大学のある学生さんが、先生の指導のもとですばらしいロシア語劇を演じていたことを

思い出しました。彼はお酒にまつわる失敗談には事欠かない学生だったのですが、その彼が、舞台では、まるでロシアからそのまま連れてきたような酔っ払いのオッサン役となって無類の輝きを放っていたのです。適材適所とはよく言ったもので、このとき村田メソッドの効果のほどをまざまざと見た私は、先生の講評がすんなりと腑に落ちたのでした。

<交流会>

コンテスト終了後は、創価大学ロシアセンターの部屋にて、恒例の交流会が開かれました。この交流会は、出場者や審査員、観客やスタッフが誰でも自由にお茶やお菓子をいただきながら歓談できる、打ち解けた雰囲気の空間です。

今回もまた JIC に若干のアピールの時間をいただいたので、改めて自分たちのことを紹介し、今すぐ申し込めるロシアや中央アジアへの留学プランを宣伝してきました。以前お渡ししていた賞品はモスクワ往復航空券だったことをお話しすると、驚きの声が漏れました。今のロシア語学習者にとって、やはりロシアは遠くなっているようです。

本当は、私達は今でも、優勝者には航空券を受け取ってもらって、ロシアへ行ってほしいのです。数年前まで、スタンダード部門の出場者の多くはロシア留学経験者でした。しかしその伝統は新型コロナ流行と戦争によって断絶し、前回のコンテストでは、出場者の大半が、海外渡航そのものが未経験で挑戦する状況にまでなっていました。

今回はロシア、カザフ、ウズベキスタン、アゼルバイジャンなどロシア語圏への渡航・留学経験者が何人かおられたように見受けられ、それははっきりとコンテストの質的な向上に現れていたように思います。

ウズベキスタンといえば、今回は聴衆の中にウズベキスタン大使館職員の畑野真也さんの姿がありました。彼は私の個人的な友人でもあるのですが、この日は大使館の仕事があったところを、早めに切り上げて駆けつけてくれたのです。これからもロシア語圏の留学先として有力な候補であり続けるであろうウズベキスタンのことなので、畑野さんをホストである創価大学の江口満先生に引き合わせて、名残惜しく会場を後にしました。

<後日談>

後日、長らくこのコンテストの審査員長をお務めになった中澤英彦先生から私に丁寧な挨拶状が届きました。中澤先生曰く、コンテストが土曜日開催に変わってからどうしても出席ができなくなり、今回は村田真一先生にご依頼なされた由。そのような事情も知らず、去年は先生に会えないことを勝手にさびしがってこの紙面でぼやいてしまいました。先生、すみませんでした。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン
相談受付中!

期間：2026年4月1日より10ヶ月

締切：2026年1月14日

※ウラジオストク極東連邦大学の締切は12月13日

モスクワ国立大学 1,590,000 円(授業料 10ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,155,000 円(授業料 10ヶ月)

ゲルツェン教育大学 998,000 円(授業料 10ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 420,000 円(授業料 10ヶ月)

ペラルーシ国立外国語大学 422,000 円(授業料 10ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆編集後記◆◆

▼本号は、新年恒例のスタッフあいさつを中心に編集しました。ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ交流に取り組む JIC スタッフの意欲はまだまだ健在です。▼ウクライナ戦争の終わりはまだ見えません。停戦交渉の1日も早い進展を望みます。と、ここまでは1年前とほぼ同じ書き出しになりました。▼しかし、年初の米トランプ政権によるベネズエラ侵攻以来、隣のコロンビア、キューバ、そしてイラン、グリーンランドと、世界は100年以上前の荒々しい帝国主義時代に戻ったかのように、俄かに雲行きが怪しくなってきました。アメリカ、ロシアと2つの核超大国が、国際法を無視して腕力に任せたやりたい放題を始めたら、どうなるか。▼20世紀に膨大な犠牲を払って積み重ねられた国際秩序が崩壊の危機に瀕している今、私たちはこの世界で何ができるのか、何をしなければならぬのか、深く考えないわけにはいきません。確かな「解」は見えませんが、この重い課題をともに考え、自分たちの活路を見出す1年にしたいと思います。本年もよろしくお願ひいたします。(F)